＊＊＊

「海の生き物を守る会」メールマガジン　No. 52　　　2009.12.16（水）

うみひるも

Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage：http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html

＊＊＊

「今月の海」　西表島浦内川河口干潟

沖縄県八重山諸島の西表島の浦内川は原生的な自然が残されている亜熱帯の川であり、河口付近には広大な砂質干潟が広がり、マングローブ林が熱帯特有の生態系を作っている。河口干潟にはトゥドゥマリハマグリ・ムラサキオカヤドカリが生息するなど希少な動物も非常に多い。近年この河口横のトゥドゥマリの浜（月ヶ浜）の砂浜直前に大規模ホテルが建ち、河口域生態系が汚染される危機に陥っている。また、エコツアーと称するカヌーによる多数の観光客の入り込みによる環境への影響も心配されている。　　　　　　（2004 年 4 月西表島浦内川河口にて　　向井　宏撮影）

＊＊＊

目次　　「今月の海の生き物」西表島浦内川河口干潟

１．海の生き物とその生息環境に関するニュース

２．海の生き物を守る会の現在の活動と予定

３．海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

４．海の生き物とその環境に関する出版物の紹介

５．連載エッセイ（１８）

「自分さがしの自然観察―私たちはなぜ生きている」横濱康継

６．事務局便り

７．編集後記

８．「うみひるも」と「海の生き物を守る会」について

＊＊＊

1、海の生き物とその生息環境に関するニュース

【国際】

●ガラパゴスの生物に絶滅の危機

ガラパゴス諸島の研究・管理を行っているチャールズ・ダーウィン財団と自然保護を訴えているコンサベーション・インターナショナルの、アメリカやエクアドルなどの研究者グループがガラパゴス諸島の調査を行った。その結果、かつてこの付近の海にたくさん棲んでいたスズメダイの一種やガラパゴス諸島の固有種である 24 本脚のヒトデなど 9 種類の動物が絶滅したことが分かった。一方、オサガメやタイマイなどのウミガメ類などの 9 種類が絶滅の危機に瀕しているとしている。原因は乱獲や地球温暖化が疑われており、低温を好む藻類など 7 種の植物が過去 20 年間見つかっておらず、絶滅した可能性が高いという。

●南極観測船しらせ出航　生物や海水を採取

南極観測に出航した新観測船「しらせ」はインド洋沖で本格的な海藻観測を開始した。水深 20~500m の海水を採取し、塩分、窒素、リンなどの濃度を分析したり、プランクトンネットで動物プランクトンを採集した。これらはこれまで約 50 年間続けてきた作業で、長年の結果を比較しながら、地球温暖化などによる長期的環境変動を調べる。

●大西洋のクロマグロ　全面禁漁への一歩

11 月 9 日からブラジルで始まった大西洋まぐろ類保存国際委員会(ICCAT)の年次会合で、2010 年の漁獲枠が 4 割減の 22,000 トンから 13,500 トンに減少し、日本の枠は 1,871 トンから 1,148 トンに削減した。もっとも世界全体の枠のほとんどが最終的には日本へ輸出され、日本で消費されているので、実質的には日本に来る大西洋産クロマグロが 4 割減になるだろう。

一部の国から出ていた東大西洋産クロマグロの全面禁漁の提案は、2010 年に科学委員会を開催し、科学委員会が資源崩壊の危機にあると認めた場合は、2011 年から全面禁漁とすることを申し合わせた。

また、地中海での巻き網漁の漁期を今までの半分の 1 ヶ月に短縮し、2013 年までには漁獲能力を削減することを申し合わせた。一方、西太平洋のクロマグロについては、これまでの漁獲枠を維持することとなった。鯨に次いでクロマグロの禁漁がほぼ国際的な流れとなりつつある。

●ロシアがタラバガニ漁獲枠を 7 割削減　資源保護策を強化

ロシアの漁業庁は、資源の減少が危惧されているタラバガニの資源を守るために、来年の極東海域でのタラバガニ漁における漁獲量を、今年に比べて 69%削減して、資源保護策を強化すると発表した。タラバガニはほとんどが日本などへ輸出されており、来年以降はタラバガニは大幅に値上げされる可能性がある。ロシア漁業庁の広報官は「密漁がひどく、2 年前に 15%ほどの削減という保護策を決めたが、ほとんど効果がなかったことが調査の結果明らかになった。このままでは日本の領海のように資源が枯渇するおそれが強いため、極端とも言える措置に踏み切った」と述べた。日本も、カニの大量消費という食文明を変えていかねば世界から指弾されることになるだろう。

【全国】

●総合海洋政策本部が、離島保全の基本方針を決定

民主党政府は、政権交代後初めての総合海洋政策本部の会合で、離島の保全と管理に関する基本方針を決定した。広い排他的水域を維持するためには離島の保全が必要というもので、沖ノ鳥島が波によって崩壊し、日本国土といえなくなるのを防ぐためが、もっとも差し迫った課題だった。鳩山首相は「排他的水域は世界で 6 番目に大きい日本なので、開発すれば海洋資源大国になれる」と、保全よりも開発を指向するような考えも表明した。

離島の保全と管理に関する基本方針は昨年 3 月に閣議決定した「海洋基本計画」に基づいて策定されたもの。浸食や海面上昇で沖ノ鳥島が水没するおそれがあり、失えば広大な排他的経済水域を失うことになることを怖れて定めたもので、海岸線の保全工事を行ったり、海洋資源開発のための拠点を整備すること等と同時に、最後に言い訳のように「離島の自然環境の保全」という項目も入れた。海洋政策担当相である前原誠司国交相は、来年の通常国会で法律を作り、所有者がはっきりしない離島に名前を付けて国有化したいと述べた。

【北海道】

●函館武井の島のオオバンヒザラガイ　伝統の味

函館市戸井地区の沖にある武井（むい）の島から東側に生息するオオバンヒザラガイは、地元の漁師たちが昔から食用にしており、酢味噌和えなどで食べるという。市場には出されていないが、とくにお正月前の時期には、地元で出回っているという。オオバンヒザラガイは、この地方では、「むい」という名前で呼ばれている。ヒザラガイの仲間でもっとも大きくなるオオバンヒザラガイは、寒流域に特徴的な生物で、函館付近では武井の島から西側には生息しない。土地の伝説では、大昔「むい」とアワビが喧嘩をして勝負が付かず、結局武井の島から東に「むい」が棲み、西にアワビが棲むことにしたという。「棲み分け」概念の昔話風説明だが、現在のアワビとオオバンヒザラガイの分布の違いを説明していて興味深い。

【東北】

●縄文以来の仙台湾の砂浜　あと30年で消滅の恐れ

全国的に砂浜の後退が進んでいるが、宮城県仙台湾の砂浜（45km）も消失が続いている。東北学院大学の松本教授の調査によると、今後 30 年で仙台湾の砂浜が消滅するおそれが強いという。松本教授は過去 30 年間にわたって仙台湾の 19 ヶ所で断続的に砂浜の調査を続けてきた。地層の調査から、縄文時代から仙台湾の砂浜は徐々に発達し、5000 年かけて沖合 5km まで発達してきたが、1990 年代から港湾施設や防波堤の建設によって部分的に砂浜が消滅、2000 年頃から全面的に後退が始まったという。

仙台平野に続いている仙台湾の砂浜は、縄文時代以来 5000 年以上にわたって続いてきたが、2000 年ころから後退し始めた。原因は、砂を供給する阿武隈川や海岸の護岸工事、ダムや砂防ダムなどによって砂の供給が無くなったことである。2000 年 10 月頃には幅 45m あった岩沼市の長谷釜海岸の砂浜が消失した。南北 13.5km の海岸線で松本教授が試算したところ、砂の残存量 844 万 m3 に対して、年間の浸食量は 28 万 m3 で、砂浜の寿命は今後 30 年となった。松本教授は「根本的な対策はない」と述べているが、ダムの撤去、港湾の防波堤を透過性のあるものに改良するなど、根本的な対策は砂の供給を妨げるものを無くすことである。ダムの撤去と川の三面張りを撤去することで、かなりの砂浜や干潟の復活が見込めるはずだ。本当の干潟再生は、人工干潟を作ることではなく、ダムの撤去、河川改修の見直しから始まる。

●松島にサンゴタツ復活を　水族館が繁殖、放流

日本三景の一つとして知られる宮城県松島湾のアマモ場には、サンゴタツと呼ばれるタツノオトシゴの一種が多数生息していたが、近年アマモ場の衰退とともに減少し、絶滅も心配される状態になっている。松島町の「マリンピア松島水族館」では、このサンゴタツを復活させて「昔のようにサンゴタツが漂う海に戻したい」と、繁殖や放流に取り組んでいる。しかし、タツノオトシゴ類は産卵数が少なく、雄がお腹に卵を抱えて稚魚になるまで保護する習性があり、たくさんの稚魚を得るのは難しい。水族館では東海大学の赤川教授

の指導で、繁殖技術を研究し、06 年からサンゴタツの稚魚の放流を始めて、今年も約 100 匹を放流した。松島湾は近年下水施設の整備が進み、やや水質も改善傾向で、アマモ場の回復の兆しもあるということで、サンゴタツの復活が期待されている。

●突堤が効果？　砂浜前進と評価　石巻･横須賀海岸の浸食対策研究会

宮城県石巻市長面地区にある横須賀海岸の砂浜の浸食が進み、砂浜が消失するおそれがあることから、対策を話し合う横須賀海岸浸食対策研究会が開かれた。横須賀海岸は 2004 年頃から急激に後退を始め、06 年には市は海水浴場を閉鎖せざるを得なくなった。そのために、同年に田中仁東北大学教授を会長に 12 人で研究会を発足させた。

今回の研究会では、砂の流出を止めるために 2008 年に設置した長さ約 50m の人工突堤が一定の効果を上げていることが行政側から報告された。報告によると、海岸線の後退はほぼ止まり、むしろ前進する傾向にあるとしている。研究会では、砂浜の形成が安定傾向にあると結論づけ、突堤の延伸や人工的に砂を入れる「養浜」を検討する。しかし、突堤の効果が認められ、砂浜が安定状態にあるなら、突堤の延伸も養浜も必要ないのではないか。このような有識者による委員会が、行政の土木工事を認めるだけの委員会になっていることはないだろうか。

【関東】

●海藻おしば協会が環境大臣特別賞受賞

第 29 回全国豊かな海づくり大会において、海藻おしば協会（代表：野田三千代氏＝本会会員）が「漁場・環境保全」部門において、環境教育としての長年の活動が認められ「環境大臣特別賞」を受賞した。

【中四国】

●橋脚造らず河口の環境を守る

高知県須崎市の新荘川河口部に架けられる高知自動車道の「新新荘川橋」は、架橋工事にともなう環境改変で河口に住むイドミミズハゼなどの希少生物の生息環境が破壊されるとの指摘から、橋脚を作らないアーチ橋として作られている。工事でも川に重機などの機材を持ち込まない工法をとっており、地元の NPO らも評価し、今後このような環境を守る工事が広まって欲しいと述べた。

【沖縄】

●ジュゴンの保護を米機関に訴える

アメリカ軍の普天間基地代替え基地として建設が検討されている沖縄県名護市辺野古の周辺海域に生息しているジュゴンの保護を訴えている市民団体「沖縄ジュゴン環境アセスメント監視団」の東恩納琢磨代表らが、アメリカ政府独立機関の海洋哺乳類委員会（MMC）

年次大会で、沖縄のジュゴンと基地建設のための環境アセスメントについて報告し、基地を利用するアメリカ政府にも責任がある、現地を視察して欲しいと訴えた。MMC は個体数が減少した海洋哺乳類の保護策をアメリカ政府に勧告するための機関。沖縄のジュゴンの情報収集と地元の意見聴取を目的にジュゴン保護市民団体を招聘した。

MMC の大会では、市民団体の訴えに対して、辺野古の環境アセスメントを MMC 自身が科学的に検証して、その結果をアメリカ政府に勧告する意向を持っていることを明らかにした。要請に参加したアセス監視団の吉川秀樹さんは「MMC が（アセスの内容を）『おかしい』と言えば、裁判所もその意見を参考にする可能性もある」と検証に期待する。沖縄県環境影響評価審査会の宮城邦治副会長は「審査会では専門家の立場から意見したが十分だとは思わない。MMC の勧告や評価が追い風になって事業者に考える機会が出てくるのは重要なこと」と話した。

●ジュゴン保護で新訴訟　環境法律家連盟ら

沖縄県名護市周辺の海域に生息しているジュゴンの保護を求めて、辺野古基地建設の中止を求める市民団体がアメリカで起こした訴訟は、昨年 1 月に中間判決があり、アメリカ国防総省に対して、アメリカ文化財保護法（NHPA）に基づく環境影響調査の実施を求めており、原告側の実質的勝訴となっている。国防総省は、日本政府が行っている環境アセスメントで十分ジュゴンの保護に対処できると反論しており、来年早くにも最終判決が出される予定である。

一方、原告側の日本環境法律家連名の籠橋隆明弁護士は、アメリカの「種の保存法」（ESA）に基づくあらたな訴訟を提起することを検討している。籠橋弁護士が 10 日、日本外国特派員協会で講演して明らかにした。籠橋弁護士によると ESA に基づいて原告の主張が認容されれば、保護地区の設定や人工構造物の撤去など、強力な執行力のある判決となるという。ただ、ESA の効力が他国でも適用させられるかどうかは上級審で判断が固まっていないが、辺野古周辺の場合は米軍の事実上の統制下にあることから、判決効力が及び可能性があるとして、訴訟の法律構成を含めて検討を進めている。

社民党の福島瑞穂大臣は、「鳩山首相はジュゴン訴訟に関して『日本にどういう効力があるか』と聞いて、関心を持っている」と話しており、新政権が普天間問題のどう取り組むかに影響もあり得るとしている。

●観光・健康2案決定　泡瀬埋め立て

沖縄県沖縄市の泡瀬埋め立て事業が経済的合理性がないとして、福岡高裁で公金支出差し止め判決がでた問題で、沖縄市では埋め立て事業の見直し案をまとめるため、市の活性化百人委員会土地利用計画見直し部会で、「市民案」2 案をまとめた。

それによると、世界一のプールを作る「エコ・健康保険・国際観光リゾート」案と、スポーツ施設を作る「健康を作り出す島」案。「国際観光リゾート」案では、環境に配慮して埋め立てを 56 ha に縮小し、護岸で囲まれた 40 ha を海水プールとして利用するというもの。周辺に温泉施設やホテルを建てる。「健康を作り出す島」案は、サッカースタジアムや医療施設、スポーツ科学研究施設などの箱物を建設する。

今後、専門家でつくる「検討調査委員会」に 2 案を提出し、最終的な案をまとめる。しかし、あのきれいな海を埋め立てて、世界一のプールを作るなんて、どう考えても頭がおかしいとしか言いようがない。あくまで埋め立てを前提とした「市民案」を本当に市民が支持しているのか、社民党出身の東門美津子市長の良識が疑われている。

2、海の生き物を守る会 現在の活動と予定

全国の砂浜海岸生物調査にご協力下さい

多くの人が、多くの海岸でこの調査に参加していだけるようにお願いいたします。ご協力いただける方には、方法と調査報告用紙をメールでお送りいたします。当会のホームページ http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html にも掲載しています。

これまでに会員や非会員のみなさまから寄せられた調査票は53枚、全国35ヶ所の砂浜で調査が行われました。全国の砂浜調査にするには、まだまだ多くの海岸で調査が必要です。最低各県で2－3ヶ所の砂浜を調査し、全国で100ヶ所以上を目指しています。ぜひともみなさまのご協力をお願いします。これまで調査された砂浜の都道府県は以下の通りです。

北海道、青森県、神奈川県、千葉県、三重県、和歌山県、福井県、京都府、大阪府、兵庫県、香川県、高知県、山口県、福岡県、沖縄県

3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【関東】

●田ノ浦は生物多様性のホットスポット

「聞いてみよう、生物（いのち）の声　映画と講演の集い」

日程：12 月 27 日（日）14 時～

場所：文京区勤労福祉会館・会議室（駒込駅東口下車徒歩 9 分/田端駅北口下車徒歩 10 分）
講師：野間直彦さん（滋賀県立大学・日本生態学会上関アフターケア委員）
映画：ぶんぶん通信 No.2（鎌仲ひとみ監督作品・2009 年・63 分）
上関・田ノ浦写真展も同時開催　　詳細は　http://momotomonet.seesaa.net/
主催：ももんがともだちネット　momotomonet@hotmail.co.jp　090-9106-0308（夜間のみ）
　　今とこれからを考える一滴の会　03-5313-1525

●「ぶんぶん通信上映会」

12/27（日）＠東京・永山公民館４F　視聴覚室
＊上映スケジュール（2 回上映）
〈１回目〉ぶんぶん通信 no.1　　9：30〜10：40
　　ぶんぶん通信 no.2　　10：45〜11：48
〈２回目〉ぶんぶん通信 no.1　　12：30〜13：40
　　ぶんぶん通信 no.2　　13：45〜14：48
＊鎌仲ひとみ監督　来多摩!!　講演
「持続可能な未来を求めて〜新しいエネルギーで暮らすスウェーデンは今〜」（15:00〜15：45）
＊ダイアログ・カフェ
無農薬・有機栽培のお茶をいただきながら、鎌仲ひとみ監督を交えて、環境・エネルギー・食・人（平和）をテーマにそれぞれのテーブルに分かれて、自由な発想で理想とする多摩市の未来予想図をつくります。こどもたちも交えて色んなアイディアを出し合いましょう♪
＊もやいメッセージ・アクション
卑劣なやりかたで埋め立てブイを設置されてしまった上関に、応援手作りもやいを送ります。それぞれご来場くださったみなさまから自由にメッセージを書き込んでいただきます。
＊多摩市身のまわりの環境地図展　　受賞作品の展示　制作「永エコキッズ」
・2008 年度受賞作品　「多摩市の生物多様性マップ」　環境理事長賞
・2009 年度受賞作品　「多摩市のしせつ eco チェック」　佳作
＊ＪＩM-NET バレンタインチョコレート（劣化ウラン弾の被害でこの 10 月逝去したイラクのサブリーンがパッケージデザイン）哀悼の意を込めご紹介
＊9 パンレボリューション　憲法 9 条の 9 をかたどったパンのご紹介（オーガニックとドメスティック食材）
＊その他・各種　講演資料・関連書籍のご紹介
＊鑑賞券（当日券は残席がある場合のみ販売）前売券／当日券 大人　800 円／18 才以下・（価格は全て税込）。障がいをもつかた 無料。当日券は残席がある場合のみ販売。
*ネット予約「たえのは」　チケット予約　佐々木：090-4014-1844　　多賀：090-6153-7071
全席自由・1 回目/2 回目入替制

●申し込みの際、鎌仲ひとみ講演を希望と明記してください。会場の関係から鎌仲ひとみ講演は先着４８名といたします。
主催　：　永山エコクラブ／永山公民館
後援　：　多摩市教育委員会
協力：EARTH VISION 多摩実行委員会、多摩市民環境会議みずとみどりの部会、たえのは
＊特設サイト http://nagaeco.taenoha.com/
＊こちらはミツバチがぶんぶん飛んでいます～ http://nagaeco.blog116.fc2.com/

●―――海辺の学生フォーラム 2010―――
～海辺　未来に生きる　僕らの描く　リーダー像～

〇海辺の学生フォーラムとは海をテーマに学び活動をしている人々が交流する場です。この場を通じて、海辺の未来を担うリーダー像を創造していきます。

―多くの生きものが住んでいる、海。
―私たちの感性を育む、海。
―あらゆるフィールドになる、海。
―全てとつながっている、海。
―様々な恩恵をくれる、海。

いろいろな面でテーマになる、海。その全ての分野を含めた「海辺」。そんな海辺の未来を、海に「学」び親しみながら「生」きている僕ら「学生」で、考えていきましょう！（※現役大学生でなくても、大歓迎！）未来の海辺に生きる僕らに、今、できることは、未来での理想の姿となる「リーダー像」を描くことなのです。

熱い想いが出会い、新たな絆が築かれる２日間。海についての学びが深まり、視野が広がる。未来の自分の姿にも気付いてくる。こんな僕らの２日間を、社会にも発信！２日間で終わりにするのではなく、その後もずっと、もっと、続いていく。・・・そんな場になるのが、海辺の学生フォーラムです。

〇内容
・グループディスカッション
・ゲストスピーカーによる基調講演
・ポスターセッション（活動紹介）
・生物多様性コンテスト
詳しくはＨＰをご覧ください。http://www.popoftheworld.net/sssf/
〇開催概要
日時：２０１０年３月６日（土）～７日（日）
場所：東京海洋大学　（東京都品川駅）
定員：１００人

申し込み方法：１１月上旬から受け付けを開始します。
　　ホームページからお申し込みください。http://www.popoftheworld.net/sssf/
主催：海辺の学生フォーラム実行委員　sssf2010@popoftheworld.net
　　http://www.popoftheworld.net/sssf/
○お問い合わせ先　sssf2010@popoftheworld.net　担当：相良

●MTS(Marine Technology Society)

◎日時：12 月 8 日(火)16:00－17:30
◎場所：(独)海洋研究開発機構（JAMSTEC）東京事務所会議室
＜プログラム＞　　（司会：MTS 日本支部副支部長・宮崎武晃）
◆開会挨拶　　・・・・・・・・・・・・・・MTS 日本支部長　酒匂敏次(16:00)
◆「OCEANS 2009 視察調査報告」・・・東京大学生産技術研究所特任教授（16:10）
　　MTS 日本支部トレジャラ　高川真一
◆特別講演：「浮遊生物種多様性とその生態機能を地球規模に調査するシステムの開発」（16:30）　（独）海洋研究開発機構海洋・極限環境生物圏領域海洋生物多様性研究プログラム　Dhugal Lindsay 博士
◇17:30 より有志で、会費制で懇親会を開催します。
＜参加申込＞mts@ab.inbox.ne.jp
※MTS の会員・非会員にかかわらず、奮ってご参加ください。

●「海藻おしば協会指導者養成講座」シリーズ
第２回目（スキルアップと水を巡る環境講座）

・日時平成２２年１月２４日（日）午前１０時～午後５時まで（予定）
・場所東京・赤坂・日本財団ビル会議室予定４階会議室
・対象一般（協会登録条件）／海藻おしば協会会員
・参加料：￥3,500（テキスト代含む）
＊海藻おしば協会会登録費￥3,000（入会金・年会費・海の森基金など）第１回目に協会登録済みの方を除く
・講師：清野聡子先生／東京大学大学院総合文化研究科助教
：野田三千代氏／海藻おしば協会会長：横浜康継氏／海藻おしば協会顧問
：フォトジャーナリスト／尾澤征昭（海藻おしば協会／事務局長）
内容：午前10時開校式【挨拶／梅谷佳明氏：日本財団海洋グループ担当／野田会長／横浜顧問】事務局からの連絡事項など、認定指導者による現状レポート
10:30～11:30（途中休憩あり）
・認定指導者による「海藻おしば教室実施」報告／河原美也子・橋本美穂・渥美圭子・湧田登美枝（依頼先との交渉・経費算出・海藻のお話・作品の作り方説明などのポイント

11:30～12:00
指導者認定審査（15分程度の模擬教室実演・作品提出・指導者への抱負と実績レポート
13:00～14:30 環境講座
・テーマ「水圏を巡る法的整備と自然環境保全の現状」
・講師：清野聡子氏：東京大学大学院助教
14:45～16:00
・テーマ「水圏を巡る自然環境保全活動の事例紹介」
・講師：尾澤征昭氏：フォトジャーナリスト
16:00～17:00：参加者全員による懇談会／閉校式／解散
指導者認定審査で合格し、経験を積んだら各地の海藻おしば教室のサポートも可能。
＊参加申し込みは、参加申込書にご記入の上、メールまたはＦＡＸあるいは郵送にて12月20日（必着）までに。http://www.kaisou048.com

【中四国】

●三学会合同シンポジウム「上関　瀬戸内海の豊かさが残る最後の場所」

日本生態学会と日本鳥学会、日本ベントス学会のそれぞれの自然環境部会が合同で、以下の要領で合同シンポジウムを開きます。

日時：2010 年 1 月 10 日（日）13:30～16:30
場所：広島国際会議場「ヒマワリ」
プログラム
はじめに「上関原子力発電所建設計画のあらまし」佐藤正典（鹿児島大学）
講演「周防灘に残されている瀬戸内海の原風景」加藤真（京都大学）
講演「希少な鳥類について」飯田知彦（九州大学）
三学会の要望書の説明
安渓遊地（日本生態学会）
佐藤重穂（日本鳥学会）
向井　宏（日本ベントス学会）
コメント「陸上生物、里山の観点

から」野間直彦（滋賀県立大学）
コメント「生物多様性保全の観点から」花輪伸一（WWF-J）
コメント「生物多様性条約に基づく国の政策」国会議員（調整中）
参加費：無料
後援：（財）日本自然保護協会、（財）WWF-ジャパン、ラムサール・ネットワーク日本

●「ぶんぶん通信 no.1」上映会＆お話会

すおうにうかぶあおいしま―祝島の空と海といのちを想う上映会

日時：12 月 20 日（日）　10:30 開場、11:00 上映スタート
会場：本願寺　広島別院　大会議室（広島市中区寺町）
参加費：自由懇志（おこころのままに）
主催：海と風と光の会 岡本（090.7503.4989）
トークゲスト：
　高島美登里さん（長島の自然を守る会）「長島の自然と生き物たち」
　小倉亜紗美さん（エコライフクリエーター）「地球温暖化とエネルギー」
上映会・トークを含め 15:00 終了予定、部分参加も OK です！参加費はカンパ制で、集まったお金は祝島島民の会へのカンパとさせて頂きます。主催は 12/6 の講師、岡本さんです。
詳細はこちら→No Nukes Relay　http://nonukesrelay.jugem.jp/?eid=82

●上関埋め立て阻止行動への参加呼びかけと注意事項について

（虹のカヤック隊より）

【阻止行動への参加呼び掛け】　虹のカヤック隊・吉村健次
ご存じの通り、阻止行動の場は田ノ浦へ移り、我々カヤック隊は祝島の皆さまに用意して頂いた、祝島「虹の家」と田ノ浦の団結小屋に分かれて毎日７時ごろ海に出ています。現場では強引な作業はなくなったのですが、引き続き、台船１隻と陸の作業員は様子をうかがっているので、気が抜けない状況は続いています。11 月 7 日に負傷したカヤック隊のメンバーも回復し、元気になりました。9 月からの阻止行動を続けてきた田名埠頭に比べ、田ノ浦は交通の面からしても厳しく、阻止行動の参加者が激減しています。カヤックと漁船による監視・阻止行動だけではなく海岸の座り込みもしているので、協力していただける方は是非田ノ浦にお越し頂ければと思います。せめて週末だけでも朝から参加していただいたり、もしくは前日に団結小屋（ログハウス／集いの場）に泊って頂いて、浜に出てもらえれば大変助かります。私たちも家庭があり、２か月間ほとんど仕事をしていない状況が続けば生きていけないので、いつまでもこの阻止行動を続けるわけにはいかなくなるでしょう。上関原発に反対する人々が助け合い、「現地での行動は現地の人に任せる」ではなく、「現地に行ける人は行って協力する」事が出来れば、今の阻止行動が長く続くでしょう。皆さまそれぞれの役割がある事は承知の上、少しでも長く、「現場工事を阻止出来ている」

状況を続ける為の提案です。以上、自分の事としてご検討頂ければ幸いです。　　敬具
カヤック隊を代表して、吉村より

……

【田ノ浦訪問を検討されている方へのお願い】　虹のカヤック隊・原康司

田ノ浦へ来られる方の交通手段や事情もいろいろあると思います。それと現地も一日一日状況が変化しています。一番確実なのは直接連絡して頂く事かと思います。私の携帯は090-6843-9854なので来られる方がおられましたら連絡をください。毎朝日の出前から動いていますので、夜遅くの訪問は控えてください。現在、建設中の監視小屋の周囲にもテントを張っています。（小さいテントならあと 2 張くらいなら張れます。）電気も水もありませんがテントが好きな方はご利用ください。もちろん水や食料など各自で用意していただくことが基本です。現地には水道がありません。雨水を利用し飲料水は持ち込んでいます。もし手が空いている方がおられましたら来られる際にポリタンクに水を運んでいただけますと非常に助かります。日常的に水が不足しています。炊事なども女性陣を中心に毎日自炊をしています。料理が得意な方がおられましたら是非ご協力していただき炊事の負担を減らして頂ければと思います。あと祝島へお越しの方は旅館・民宿などをご利用ください。現在カヤック隊に提供して頂いている家は原則、田名から阻止行動を長期続けている隊員のために用意していただいています。宿泊はできませんのでご了承ください。以上よろしくお願いいたします。

……

【田ノ浦海岸までのアクセス】

初めて田ノ浦を訪ねる方は、受け入れ体制・現場の状況をご確認の上でお訪ねください。
現場の連絡先　虹のカヤック隊・原康司：090-6843-9854
田ノ浦団結小屋（ログハウス／集いの場）：0820－65－0880
・車の場合・・・ＪＲ「田布施」駅から車で６０分。室津港から約３０分
上関大橋からは、添付の地図に沿って、赤線のルートで行ってください。
※注意事項…四代手前の田ノ浦への分岐地点で警備員が立っていることがあります。「どこへ行くのか」と聞かれる場合がありますが「祝島の小屋へ行く」と行ってください。すんなりと通過できます。
・公共交通機関を利用の場合・・・
駅は近くにありません。最寄りの港は「蒲井」か「四代」です。それぞれの港から田ノ浦海岸までは、徒歩１時間～２時間ほどかかります。
定期船「いわい」：http://www.iwaishima.jp/home/info/time_table.pdf

上り時刻表				下り時刻表			
	１便	２便	３便		１便	２便	３便
祝 島	6:35	12:30	17:00	柳井港 ―	9:30	15:30	
四 代	6:50	12:45	17:15	室 津	6:00	10:00	16:00

蒲 井 7:00 12:55 17:25 上 関 ー 10:05 16:05
上 関 7:10 13:05 17:40 蒲 井 ー 10:15 16:15
室 津 7:15 13:10 17:40 四 代 ー 10:25 16:25
柳井港 7:45 13:40 ー 祝 島 6:28 10:40 16:40
運賃 祝島からの値段
四代 蒲井 上関 室津 柳井港
大人 530 650 900 900 1530
小人 270 330 450 450 770
タイミングによっては、それぞれの港から、田ノ浦に向かう車に同乗出来る場合もあります。それも現場の状況次第ですが、このような相談についても、事前に（前日までに）連絡をいただけるとありがたいです。（※詳しくは、以下【田ノ浦へ来る場合】を参照）
……

【応援物資・カンパの窓口】

１、「虹のカヤック隊」カンパ口座
　東山口信用金庫　遠石（といし）支店　0207592　ピースウォークヤマグチ
２、「上関原発を建てさせない祝島島民の会」
　郵便振替０１３９０－４－６７７８２　　祝島島民の会
３、「虹のカヤック隊」食料・防寒具・テントなどの物品カンパ窓口
４、応援の布メッセージ受付
・布メッセージ送り先：「上関原発を建てさせない祝島島民の会」742-1401　山口県熊毛郡上関町大字祝島２１８
・布メッセージプロジェクト」問い合わせ先：　RadioActive（冨田貴史）　080-6947-2491
　takafumitomita1320@yahoo.co.jp
・「布メッセージ」参考記事：
http://radio-active.cocolog-nifty.com/blog/2009/09/post-61a8.html
……

【祝島の宿泊施設】

はまや旅館　0820-66-2018　７室 20 名　港のすぐ前
みさき旅館　0820-66-2001　５室 20 名　公民館のななめ向かい
民宿くにひろ　0820-66-2053　4 名まで　善徳寺のすぐ前
※参考サイト：祝島ホームページ（宿泊コーナー）
http://iwaishima.jp/home/info/info.htm#yado（**交通アクセスについても**）
……

【田ノ浦へ来られる方へ】　英智郎（國本悦郎・平生町民）
田ノ浦へ行くには、車の場合、上関の室津までは室津半島の県道を通るので、お分かりになるのではないかと思います。上関大橋からは、添付の地図に沿って、赤線のルートで行

ってください。途中分かりにくい所は、コメントを入れています。
電車で来られる場合、私と行く日と時間が重なれば、田布施駅や柳井駅に迎えに行き、団結小屋へ行ってもいいですよ。田布施駅から車で１時間はゆうにかかります。車には３名乗車できます。携帯電話を持たない主義なので、夜に電話（０８２０－５６－５５４０）かパソコンのＥメールで連絡して下さい。
団結小屋にも泊まれます、寝泊まりできる寝具はありますが、自分の寝袋の方が寝やすい人はご持参下さい。雨水を使っていますので、生水は飲めません。お茶や水は持って行ってください。また、自分の食い扶持は自分でというのが基本ではないでしょうか。ですから弁当持参で。宿泊する場合は、できれば団結小屋の管理費も少しばかり入れる方がいいかもしれません。だんだんと寒さが増してきております。防寒具（ウインドブレーカー、帽子、耳あて、レッグウォーマー、・・・等）がないと寒さに震えるばかりです。団結小屋から海岸へ降りる道は狭くて降りにくいです。靴もそれなりのものを穿いて来てください。
田ノ浦の人達と話してて食料や日用品などが不足しているとのことでした。現地へ持って行くか、現地に行けなくても何か出来たらと思ってた方がいたら支援物資を下記宛に送って頂きたいです。皆が絶対に出来ることだよ。
リストは以下の通りです。
・雨ガッパ(雨風防げるもの)・インバーター付発電機・寝袋・食料品全般(特に保存がきく物)・米・カロリーメイト(カヤックの上で食べれるもの)・ヘッドライト・あったかい靴下・寒さを防げるインナー・シャツ(海の上のため速乾性のもの)・軍手・カセットコンロのガス・ホッカイロ等
※お知らせ※　12 月 3 日現在、おかげ様で物品のカンパは十分に足りている状況です。特に食品類など保存のきかないものもありますので、物品の発送をご検討いただいている方は、お手数ですが、事前に虹のカヤック隊（原：090-6843-9854）までご連絡をいただけますよう、重ねてお願いいたします。　　↓【田ノ浦アクセスマップ】

4. 海の生き物とその環境に関する出版物の紹介

●本会会員、倉谷うららさんの本「フジツボ　魅惑の足まねき」が、丸善書店の 2009 ベスト本にノミネートされ、投票結果は現在 2 位です。以下のサイトから投票できます。ごらんになった方はぜひ投票を。http://www.maruzen.co.jp/shopinfo/feature/best/vote-rank.shtml

5. 連載エッセイ(18)

自分さがしの自然観察ー私たちはなぜ生きている？ー

横濱康継(南三陸町自然環境活用センター長)

第五章　いのちについて

なぜ死を恐れるのか

幼い頃に無邪気に好奇心を満足させるという形で始まった「第二の学び」も、成長するにしたがって、その探究の対象が自分自身にも向くようになる。そして悩み始めるのだが、テレビの教育番組でも、ある中学生が「生きかた」を知りたいと語っていた。

ちょうど中学へ入学した頃から思春期は始まるのだろう。それまで何とも思わなかった自分自身の存在や自分の心のはたらきまでが謎になり、「自分はなぜ生きているのか」、「なぜ恋をするのか」、「なぜ死を恐れるのか」など、とても解答の見つかりそうもない難問が次々と浮かんでくる。

ヒトは、「自分の人生について悩む」という、他の動物からすれば全く無駄としか言いようのない性質を持っている。ヒトに最も近縁の類人猿でさえ、そんな悩みなど全く抱かずに、それぞれの社会の一員として暮らしてゆけるようになるのである。

他の動物には全くみられない「自分の人生について悩む」などという心のはたらきを持つヒトは、「非常に変な動物」としか言いようがないのだが、これをヒトが「非常にすぐれた動物」であることの証拠と思う人も多い。しかし戦争やテロのような大量殺戮、あるいは我欲や狂気のための残虐な傷害や殺しなどに類する行為は、ヒト以外のすべての動物の社会ではみられない。このようなヒトという動物を「すぐれた動物」などと呼べるだろうか。むしろ「変な動物」どころか「狂った動物」と言いたくなる。

ヒトは「すぐれた」と自認する脳を使って、核兵器あるいは生物兵器や化学兵器と呼ばれる大量殺人用の道具まで作り出してしまった。そこまで狂ってしまったヒトという動物の一個体であることを意識するたびに、私は自己嫌悪に陥り、ヒトはあらゆる動物の中で最も劣悪な形質を有する種として、この地球上に出現してしまったのだ、と断定したい気持ちになる。

いずれにしても、ヒトは非常に変わった心のはたらきを持つ動物ということになるが、これもやはり空白部分の非常に広い脳を持っているせいである。

ヒトは今から七〇〇万年前頃に類人猿から分かれて進化したらしい。脳もそれにつれ巨大化して、現在のヒトの脳は類人猿の脳の三倍以上の大きさに達し、空白部分もはるかに広くなった。類人猿に比べてはるかに広くなった脳の空白部分には、やはりはるかに多くの情報がインプットされなければならない。人はすべて、大量にインプットされる情報の質次第で美しくも醜くもなる、という宿命を背負って生まれるのである。

人間の社会には、心から尊敬できる人も存在すれば、同じ人間かと疑いたくなるほどの凶悪犯も存在する。ネコやイヌなどのペットも、飼い方によって知恵の程度も性格も変わるが、これが同じネコあるいはイヌかと疑いたくなるほどには変わらない。ネコやイヌの脳の空白部分はヒトに比べてはるかに狭いためだが、ネコやイヌに比べれば、はるかに空白部分の広い脳を持っているサルや類人猿でも、後天的に生ずる性格や能力の差は、ヒトに比べればはるかに小さく、人間界の「善人」や「悪人」に相当するほどの「善ザル」や「悪ザル」などを輩出することもない。

ヒトは特別にすぐれた動物であると自認している人がほとんどのようだが、すべての人がもともとすぐれているというわけではない。空白部分の広い巨大な脳を持つ私達は、想像・共感・同情という複雑な心のはたらきを豊かに持てるようになったが、その発露として「自分がされたくないことは他者にもしたくない」という思いを強く抱く人こそ「すぐれた人」なのである。

私達が「死にたくない」と意識するのも、空白部分の広い脳を持っているせいである。類人猿でも他の個体の死に出合った瞬間は恐怖を感ずるだろうが、いずれ自分にも死が訪れるだろうなどと、彼らが予想するとは考えられない。ヒトも幼いうちは、祖父母などの死に出合っても自分の死などは想像しないが、やがてすべての生物は必ず死ぬという法則を発見して、「死にたくない」と思い始める。少なくとも思春期を迎えてからの人はすべて「死にたくない」と意識する。しかし「なぜ死にたくないのか」と自問してみると、あまり明確な答えは浮かばないだろう。

私も絶対的な答えとでも言うべき「万人共通の死にたくない理由」はなかなか見つけられなかった。「死とはこの世に自分が存在しなくなることだから」という答えが私の心を占めた時期もあったが、この世に生まれる前には自分はこの世に存在していなかったのだから、あまり強い理由と言えそうもない。恋愛中の理由などは記すまでもないだろうが、我が子が生まれてからの私は、「自分が死んだら子供達が路頭に迷う」という確固たる理由を

胸に、ひたすら死なないようにと、細心の注意を払いながら二〇年以上を過ごしてしまった。しかしこれも「絶対的理由」とは言えない。

おそらく「怖い」というのが最も万人に共通した理由になるだろうが、なぜ怖いのかと問うと、あまり明確な答えは返ってこない。私も「子育てのため」という理由からほぼ解放された頃から、万人に共通する「死にたくない理由」と「死の恐怖」との関係について考えるようになった。

「死にたくない」と強く願った人物として最も有名になったのは秦の始皇帝（Ｂ．Ｃ．二五九～二〇八）だが、彼は死を怖がったのではなく、「せっかく天下を統一して絶対権力者になったのだから、この世でいつまでも楽しみながら暮らしたい」と思ったのだろう。

「死にたくない」理由は「死の恐怖」と「生への執着」の二つに分けられそうである。ほとんどの人は両方を併せ持っているはずだが、暮らし方や年齢によって両者の比重は変わる。始皇帝の「死にたくない」第一の理由は、「統一した天下に君臨して楽しく生き続けたい」ということだったらしいので「生への執着」に分類されるだろう。

今日の権力者やそれに連なる富裕層の死にたくない理由も、「死の恐怖」よりは「生への執着」のほうに大きく傾いているだろう。そのような彼等は他人の死に対しては無頓着らしく、多くの犠牲者が出ることを承知で、テロやそれへの報復としての作戦を敢行する。しかし古代の権力者は民衆の死に無頓着ではなかったと言えそうである。ただごく少数の聖人的君主を除けば、権力者達が想像・共感・同情という心のはたらきから民衆の生命を尊重した、というわけでは全くないのである。

原始共産制社会が専制君主制社会へ移行してから、民衆は権力者によって酷使されるようになった。私達の想像をはるかに超える過酷さの中で暮らす民衆は、「死んだほうがまし」と思っただろうと想像されるのだが、奴隷制社会で多くの奴隷が自殺したという話は聞かない。

古代には人力が現代のエンジンやモーターの代わりをしていた、というのは発想の順序が逆転しているのだが、奴隷や民衆の自殺は機械が「ポンコツ」になるのと同じである。自殺者が続出したのでは、「機械」の役を果たさない支配階級だけが残ることになってしまうので、自殺を防止する「しかけ」が必要だったはずである。その「しかけ」として利用されたのが「死の恐怖」だったのではないだろうか。

「死の恐怖」は古代の権力者によって捏造された可能性があると気づいた瞬間、私の心から「死の恐怖」は消え去った、という記憶がある。それでも遺体になったり白骨になったりすることへの抵抗感が消えるまでには、その後もかなりの年数を要した。

また「死の恐怖」は他者の死の情況を見て生まれるのではないかとも思える。死は苦痛を伴うことが多い。またごくまれに眠るように安らかに息を引き取る人を見ても、臨終を境とする動と静との隔たりには耐え難さを感ずる。そのため、もし死が体の跡形もない消失という形で起こるとしたら、死を怖いと感ずる人はかなり減るのではないかという気がする。

逆に悲惨な形の死を目撃すればするほど、死の恐怖は強まるはずである。権力者にとっては、悲惨な死を演出することが、彼等の「機械」の「ポンコツ化」、つまり奴隷などの自殺を予防する有力な手段となったはずである。

残酷な公開処刑などは最も手っ取り早い悲惨な死の演出と言えるが、無数の人のいのちを無惨な形で奪う戦争は、はからずも権力者達に好都合な死の演出の役割を果たしてきたとも言えそうである。

一方ヒトも生物なので、どのような状況下にあっても、可能なかぎり子を出産する。悲惨な状況下で生まれる子供達はあまりにも哀れだが、親も同じようにして生まれた「被害者」なのである。そして子を産んだ親は、子のためにも死ぬわけにはゆかなくなるのだが、子供も育ってから親と同じように権力者の「機械」になる。

権力者は、奴隷の「子を産む」という生物としての属性を利用して、自分達の「機械」を再生産させるのだが、そのうえ子を産んだ両親の心に生ずる愛情を、彼等の現世からの逃亡を防ぐ鉄格子として利用する。奴隷達は逃亡防止のための囲いの中などに収容されているのだろうが、子を産むと、さらに「愛という名の鉄格子」の中へ閉じ込められて、二重に収監された状態になる。専制君主制時代の奴隷や民衆は、捏造された「死の恐怖」と自然発生的な「愛という名の鉄格子」によって、この世からの逃亡も妨げられ、ひたすら「機械」であり続けたと言えるだろう。

民衆の「死にたくない」という気持が権力者によって捏造されたものであるとすれば、権力者の最たるものでありながら、最も強く「死にたくない」と願った始皇帝は、非常にこっけいな存在ということになりそうだが、やはり彼の「死にたくない理由」は、「死の恐怖」より「生への執着」のほうに、大きく傾いていたと考えるべきであろう。

史上最大の権力者の一人と言える始皇帝の「不老不死」の願いは、やはり史上最大級の詐欺師と言えそうな徐福という人物に利用されてしまう。東方の海上にある仙人の住む島から不老不死の薬を持ち帰ると約束して、徐福は莫大な資金を得るのだが、皮肉なことに、大金のほとんどは後の前漢初代皇帝劉邦の軍師となる張良の手に渡り、秦を亡ぼすための軍資金になってしまった、とも言われる。

今日でも「生への執着」の強すぎる金持ち達が大金を詐取されるという好例はある。ある超大国での話らしいが、死後の復活のための技術が開発されるまで、遺体をマイナス一九六度Ｃの液体窒素に漬けて冷凍人間にしておく、ということが実際に行われているという。生前に莫大な契約金を業者に払っているに違いないが、どんなに医術が進歩しても、死体の復活など不可能なので、やはりだまされているのである。

権力者や富裕層の「生への執着」は同情の余地もないが、彼等のようなエゴイスト達以外の人々の「死にたくない理由」にも、ある種の「生への執着」がかなりの比重を占めていると言える。私達が苦しい生活を営みながら、それでも生へ執着しているとすれば、その理由は肉親への愛以外に考えられない。子育て中の親は絶対死ぬわけにゆかないと思い、そして子育てを終えてからも、自分の死が子や孫に与える悲しみの大きさを想像する。こ

のようなささやかな「生への執着」のほかに、庶民と呼ばれる私達に残された「死にたくない理由」はやはり「死の恐怖」と言えるだろうが、これはすでに記したように権力者によって捏造された可能性が大きい。

またヒトも他の動物と同様に死を反射的に避ける能力を有する。そのような反射行動を誘起する危険な事態が「死の恐怖」という意識をヒトの心に植え付けた可能性もあり、多くの場合、死は痛みや苦しみという文字通りの苦痛を伴うということも、「死の恐怖」を助長してきたはずである。しかし恐怖も苦痛も伴わない死であれば、それは辛い人生の終焉として歓迎すべきである。ただ子育てを終えた身であっても、肉親や友との永遠の別れは耐え難いはずだが、せめてその別離は正気のうちに迎えたいと私は願う。もし認知症などになるとしたら、その兆候に気付き次第、人為的な安楽死を選びたいのだが、同じ思いを抱く高齢者は多いのではないだろうか。しかしその実現のためには、法整備も必要であり、これは今後の人類にとって極めて重要な課題になるだろう。

漠然と抱き始めた死の恐怖を克服するために、私は生物学を学び始めたのだが、以後約五〇年を経て、死とは本来恐怖すべき対象ではないと気付いた。しかし「死の恐怖」は原因不明のまま容易には民衆の心から消えそうにない。その一方で、権力者や富裕層は、民衆の犠牲を厭うことなく快楽に執着し、老後にも不老不死を求め、延命業者や復活業者にだまされるという喜劇を演じたりしている。権力者から一般民衆までのすべての人々が、やすらかな人生の終焉を抵抗なく受け入れられるようになった時、世界平和は実現するだろうとも言えそうである。（次号につづく）

６．事務局便り：

●企画案などその他なんでも本会の活動に関することは、事務局あてにお寄せください。

●このメールマガジンは、毎月 1 日と 16 日の 2 回発行の予定ですが、都合によって遅延や中止もあります。配信を希望する方、送りたい方がありましたらアドレスをお知らせください。また、パソコンを使えない環境の方には印刷体でもお届けします。その場合は、郵送料をご負担していただくことがあります。

●このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。海の生き物や守る運動についての情報など、また各地で行われている海の生物の観察会、研修会、その他の行事に関する情報もお寄せください。「うみひるも」のバックナンバーは、ホームページからダウンロードできます。

●本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ごいっしょに講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。

●本会への寄付をお寄せください。寄付も会費も同じ銀行口座「ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会」へ。

7．編集後記

今年最後の「うみひるも」を配信できてホッとしています。今年の活動は、私の多忙を理由に、少し中途半端なところがあって反省することしきりです。しかし、政権交代もあり、活動に少し幅が出てきたところもあります。利点は生かして、来年からは気持ちをあらたに活動したいと思っています。みなさま方のご協力を得られればたいへん有り難いと思います。希望に満ちた年をお迎えください。（宏）

8.「うみひるも」と「海の生き物を守る会」について

この「うみひるも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は事務局までご連絡ください。

海の生き物を守るためになにかしたい！というあなたに！

会員募集中です！

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。会費は個人 2,000 **円／年、団体** 20,000 **円／年。匿名による参加も可能です。会員は、当会の名前を使って各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行うことができ、そのための助成金申請をすることができます。活動は当会の発行するメールマガジンなどを通して広く通知されます。入会希望の方は、事務局** hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp **（向井）まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。**

メールマガジン『うみひるも』第 52 号　2009 年 12 月 16 日発行
発行＆編集人「海の生き物を守る会」代表　向井　宏
〒606-8244　京都市左京区北白川東平井町 23-1　グリーンヒル北白川 23
TEL&FAX:075-703-7205; 090-8563-1501　メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp
ホームページ URL：http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html
銀行口座：ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会